



TITLE:

<大會抄録>宋代の監司と地方官監察

AUTHOR(S):

青木, 敦

CITATION:

青木, 敦. <大會抄録>宋代の監司と地方官監察. 東洋史研究 1996, 55(3): 626-627

ISSUE DATE:

1996-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155017>

RIGHT:

大會抄録

西晉・十六國時代における河西地方の動向と特質

—敦煌墓からみた—

井上 徳子

五胡十六國時代、河西地方には前涼、後涼、南涼、西涼、北涼のいわゆる五涼が出現し、それらが互いに覇を競った。これらの五涼政權には在地の豪族勢力が參畫しているとされ、何らかの手段で爲政者の地位を獲得した者を、河西豪族がバックアップするという圖式が想定されてきた。しかし、五涼政權のすべてがこの構造を持つわけではなく、また史料にみえる爲政者側の河西地方に對する意識、河西人士の政權に對する意識も一様でない。このようななかで、河西人士の支持を受けた政權において、「河西地方は統一されなければならぬ」という意識が絶えず前面に出ることは注目値する。實際、地理的な要因からも、この地域を一つの纏まつたものとして扱いがちである。

しかし、一方で、西晉から十六國時代の墓葬の發掘報告を分析していくと、河西地方内の武威、敦煌などの諸地域の間には共通性よりむしろ、異質性が際立っており、この異質性は、諸地域の社會の特質とは不可分なものと考えられる。報告では、從來知られていた敦煌縣城の東に廣がる新店臺・義園灣・佛爺廟の古墓群に加えて、一九九四年に報告書が公刊された縣城西側に廣がる祁家灣の古墓群

の分析に觸れつつ、この時期の河西地方の統一性と非統一性について検討を加えたい。この検討が五涼政權の性格を把握する上での一助となると考えるからである。

宋代の監司と地方官監察

青木 敦

帝政時代中國の地方行政組織の變化を、人口増や地方社會の活力の上昇に伴う、地方化の傾向として捉える見方が存在する。その一つの根據は、省に代表される、廣域地方行政の確立である。

宋代には、路という地方區分に、監司等の機關が常置された。しかし、この監司の意味や機能についての從來の認識は不十分である。たとえば宋人にとって監察は、地方官（州縣官）——監司、中央官——臺諫（御史・諫官）——という型が理想であり、これまでの研究でもこれを實態として考えがちであった。ところが『宋會要』『黜降官』の事例の統計などでは州縣官の不法行爲等も約半数は臺諫によつて監察（彈劾）されており、人事面での監司の働きは甚だ不充分であった。この理想と現實とのズレについて南宋朝では様々な議論が行われており、そこからは既に當時の地方の諸問題が、御史職を帯びない監司ではなく、直接中央の御史にもたらされることが多かつた状況が見て取れる。監司制度の機能不全の一因は、明らかに中央政治ではなく地方政治の側に存在した。また州縣官の監察を御史から監司に一元化しようとする政策も幾つか行われた。冒頭

のマクロな地方化の議論への興味から、本報告では、これらについての若干の史料を挙げつつ、地方長官が御史職を兼任する明清の制度が必要となる地方政治の状況が、南宋に存在した可能性を検討したい。

關中・三輔・關西

——關所と秦漢統一國家——

大 櫛 敦 弘

秦および前漢時代、首都圏である渭水盆地一帯の「關中」地域は、その名の通り、函谷關をはじめとする關所群によって圍繞されていた。その基盤となる特別地域を他から晝然と區分するこのような「國內の境界線」の存在は、當時の統一國家體制における「地域性」のあり方を端的に反映したものである。

もともと、こうした「境界線」としての關所のあり方について述べた史料は必ずしも豊富ではないため、ここではこの關中地域の呼稱の用例に手がかりを求めることとした。すなわち當時、この地域は「關中」、あるいは「關西」「關内」など、關所との關わりにおいて區分、表現される例が多く見られるのであり、これらを「三輔」や「内史」などそれ以外の用例とあわせてその變遷・消長を整理・検討してゆくことによって——とくに史料が制約されている後漢期をも含めて——この境界線のあり方や展開についての、ある程度一貫した見通しが得られるのではないかと思われるのである。

以上よりここでは、(一)秦および前漢前期、(二)前漢後期、(三)後漢期、の三期に分けて、關中地域の呼稱の用例を検討する。そこからこの「國內の境界線」のあり方について見てゆき、さらには當時における統一國家體制の展開についても言及することとした。

百濟における中央と地方

田 中 俊 明

四七五年、建國の地漢城(ソウル江南地區)を高句麗の攻撃によって陥落させられた百濟は、急遽、南に熊津(公州)に都を定めて再興した。百濟の南方に對する關心は、その南下以來ようやく強まり、五世紀末から六世紀初にかけて、馬韓の殘存勢力(倭の五王のいう慕韓)を一掃して、南海岸までを領有した。そして五一〇年代からは、加耶地域へ進出し、西部加耶を領有していく。百濟が全羅南道地域までを領有するようになったのは、實にこの時期であり、それまでは馬韓の一部が殘存していたのである。百濟が古代の朝鮮半島の勢力分布圖において、早くから西南一帯を占めていたとするのは、まちがいである。こうした過程をまずあつづきたい。

そうした南方進出が一段落した上で、五三八年、泗沘(扶餘)遷都を敢行した。このように百濟の王都は、五世紀後半から六世紀半ばにかけて二度の變遷があった。熊津から泗沘への遷都は、近距離であったが(四〇kmほど)、その前の漢城から熊津へは大きな變化であり、すなわち百濟の中央が、大きく移動したということにな